



サラブリ救世自然農法センター

タイから広がる 熱帯地域の自然農法普及

現在、タイの首都バンコクから北東約100 kmにあるサラブリ救世自然農法センター（以下、サラブリセンター）が東南アジアにおける当センターの自然農法普及の拠点となっています。

サラブリセンターは、1988年、東南アジアを中心に世界への自然農法の情報発信を目的として、タイ中部のサラブリ県に設立され、自然農法の栽培歴30年を超えました。このサラブリセンターには水田や畑、畜舎、キノコ栽培施設といった農業用施設以外に、研修施設をはじめ、農業学校、食堂や宿舎などを備え、乾季対策用の養殖池を兼ねる多数の貯水池も作られています。

サラブリセンターの土地は農家も活用しないような非常に痩せた状態であったため、当初は小面積からのスタートが検討されました。しかし、あえて難しい土地で成功させることがインパクトのある普及につながるとの見解から、約58ヘクタールの土地を入手し、EM（有用微生物群）を活用した自然農法による栽培を始め、現在は約70ヘクタールまで敷地を拡大しています。

このサラブリセンターにおける栽培の成果は、1989年コンケン大学で開催された第1回救世自然農法国際会議で紹介され、EM技術を用いた自然農法の可能性に対する理解を得ることができました。そこで、自然農法とEM技術をさらに検証し、栽培技術や成果を世界に発信していくべくAPNAN（アジア太平洋自然農業ネット





自然農法国際研修会の開会挨拶 (上)
国際色豊かな参加者 (右)



ワーク) が設立されました。APNANはサラブリセンターをモデル農場として、東南アジア、南アジア、オセアニア地域を中心に自然農法の輪を広げてきました。

サラブリセンターは、自然農法やオーガニックを学ぶ民間施設として、多くの研修参加者を受け入れています。その数は国外から延べ3千人以上、国内では延べ10万人を超えます。また、その他多数の来場者も訪れ、それぞれの国における目指すべきモデルになってきています。

今回は、APNANが主催し、当センターが講師を務める自然農法国際研修会とタイ国内向け自然農法研修会について報告します。

自然農法国際研修会の開催

サラブリセンターではAPNANが主催する国際研修会が年2回(通常3月と9月)開催されています。2011年以降、毎年3月は自然農法に特化した国際研修会を行い、9年間で8回目(2012年は休講)となっています。

2019年は3月11~14日に開催され、参加者は35名、11カ国からの参加がありました(ベルギー、ニュージーランド、スウェーデン、ミャンマー、ベトナム、マレーシア、ブルネイ、フィリピン、ブータン、ネパール、シンガポール)。3泊4日の研修プログラムで、10回の講座と5回の実習・圃場視察があり、4日目はハーモニーライ





自家採種の実習
カボチャと
ミニトマトの
タネ採り



講義の様子



E Mボカシなど有機物の発酵技術指導



緑肥の使い方の説明



キャベツの収穫作業視察

フ農場視察（ナコーンラー
チャーシーマー県、大賀氏経営）
を行いました。

1日目に当センターが行う
講座の内容は、まず「自然農
法の理念と原理」です。基本
中の基本ですので、話す内容
は2011年当時からはほとん
ど変わらない講座です。ただ
し、以前のスライドは日本の
自然農法の写真でしたが、現
在はサラブリセンターの圃場
写真が半分以上となりました。
その後、サラブリセン
ター内を視察し、E Mボカシ
など有機物の発酵技術を学び
ます。

2日目の朝から「自家採種」
の講座と実習を行います。海
外の有機農業は自家採種が前
提となりますので、皆さん非
常に熱心です。今年度はミニ
トマトとカボチャのタネ採り
を行いました。採種果はサラ
ブリセンターのスタッフが準
備してくださったものです。

次に、「旬の栽培と育土」「自
然農法栽培」と題して自然農
法栽培の基本的な考え方を学
びます。敷草や混作、緑肥活
用などスライド写真も多くは





原土に近い圃場（左）と育土が進んだ状態の圃場（右）の土壌断面を観察



原土に近い圃場の土壌断面



育土が進んだ状態の土壌断面

右は腐植が増えて黒っぽくなっている



鞍つきの実習



水稻（左）とサツマイモ（右）の圃場視察



現在のサラブリセンターの事例です。講義終了後、圃場に出て、サラブリセンター内の原土に近い圃場と育土が進んだ状態の圃場の土壌断面を観察して、熱帯での育土について学びます。また、育土における有機物の施用方法として鞍つきなどの実習を行っていきます。

1日目と2日目の夕食後は、有志の参加者がそれぞれの国や活動について自己紹介し、交流を深めます。ブータンやネパール、ベトナム、ミャンマー……それぞれ特徴があり、非常に面白いです。

講義最終日は、自然農法のまとめですが、内容はリクエストの多い病虫害対策です。といっても、農業に頼らず、総合的に解決することが自然農法ですので、敷草や緑肥、混作、インセクタープランツを活用した育土によっていろいろな生き物が住む、国や地域に合わせた農地生態系を構築し、健康な作物を育てることにしようというまとめになります。

3日目の夜は、閉会式です。



1人ひとりに修了証をお渡しし、その後はパーティー（フンアルコールです）があります。サラプリスタッフの民族楽団や、各国からの出し物などをみんなで楽しみました。

4日目は、日本人の大賀氏が代表を務めるハーモニーライフ農場の見学をして解散です。同農場の面積は12ヘクタール。栽培種類60〜70種類、約40種類は野菜、15種類は果物、ハウスもあり、その他ハーブを栽培しています。150mの地下水をくみ上げた池の水にEMを加えてかん水し、ハーブの成分を抽出した後の残渣や自園の牧草を食べさせただけの牛の糞などこだわった有機物を堆肥化して栽培しています。栽培品目の70%は自家採種を行い、自家採種した種子の一部は直販しています。また、有機栽培モロヘイヤを練り込んだモロヘイヤヌードルをはじめ、天然の洗剤やシャンプーなど製品を開発し商品化するとともに、オーガニック、ハラルなどの認証を6つ取得し、10カ国以上に輸出もしているなど、有



ハーモニーライフ農場



機・自然農法の営農的モデル農場です。ハーモニーライフ農場については、大賀さんの著書「メコンの大地が教えてくれたこと―大賀流オーガニック農法が生み出す奇跡」を参照してください。



修了証（上）と閉会式（下）



サラプリスタッフの民族楽団





マリーゴールドとキャベツの混植をしている「ソンプン」圃場



クロタラリア障壁栽培の「マツモト」圃場

自然農法 タイ国内向け研修会

国際研修会に続き開催された研修会には、サラブリセインタースタッフを中心に約100名が参加しました。国際研修会は全てつたない英語での講習でしたが、国内向けは日本語（タイ語への通訳）による1日間の研修で、2017年より開催し、今年で3年目になります。参加者はリピーターが多く、午前中はサラブリセセンターの各圃場管理者から、昨年の研修以降に取り組んだ内容と現状について話をもらい、当センターの講師からコメントをして、情報を参加者と共有しました。

最初の圃場は、通称「マツモト」圃場です。約30年間自然農法を行っている圃場です。名前の由来は長野県松本市にある当センターの農業試験場をモデルとしています。長年の蓄積があり、土も非常に肥えています。2011年最初の自然農法国際研修会を開催したときは、モデル通り、

どこか見慣れた日本的な自然農法の畑の印象でしたが、クロタラリアを障壁作物として日陰をつくる見慣れない畑に様変わりしています。この時期のタイは乾期の後半で日中は35℃を超えますが、日陰のキャベツは虫食いも少なく、みずみずしく、立派に育っています。

次に訪問したのは、通称「ソンプン」圃場です。サラブリセセンターの栽培責任者ソンプンさんが担当する圃場です。綺麗なサツマイモを育てる農場一の農業技術者ですが、この圃場は、キャベツとインセクタープランツのマリーゴールドが綺麗に育っており、農業芸術家の才能も発揮させつつあります。

続いて、通称「農地生態系」圃場です。20年以上のマンガー畑を改植して4年目の圃場ですが、バナナを母樹として、その株間に熱帯果樹、条間に野菜を植えています。「マツモト」圃場のクロタラリア障壁栽培のきっかけとなった圃場です。担当者の奥さんがレストランの料理長で、EM





バナナの陰でみずみずしい野菜が育つ「農地生態系」圃場（上）
初めて実がなったドリアン（右）

で発酵させた生ごみをふんだんに圃場に還すことができるため、バナナも野菜も雑草も勢いよく育ち、バナナが大きく育つことで野菜に陰をつくり、みずみずしく育ちます。バナナの株間のマンゴーなどの熱帯果樹はじっくり育ち、ある程度の大きさになったところで、バナナは熱帯果樹と入れ替わります。このように果樹と野菜の組み合わせによる混植で、病虫害の少ない、みずみずしい農作物を生産しています。サラブリセンターは、元々農業ができない土地でありましたが、このような育土を行うことで、土が変わってくることを実感しているそうで、30年目に初めてドリアンの実がなりました。

最後は通称「5ライ」圃場です。タイの前国王が提唱した「5ライ農業」の自然農法モデルを担当する方の圃場です。バナナやパイヤは肥料食いで、沖縄ではその昔トイレや豚小屋の周りに植えていたともいわれています。前述の「農地生態系」圃場と同様の栽培方法ですが、こちらのバナナは少し元気がなく隣の野菜の育ちも良くありませんでした。水田から転換してすぐにバナナを植えたことと、有機物の投入量が少ないことが原因と思われる、クロタラリアを植えて土壌改良と有機物確保の両立を図るなどの工夫をしています。

研修会における圃場視察会は昨年から始めていますが、情報の内部共有が進んできていると感じられます。上記以外のどの圃場も混作が浸透しています。緑肥という概念があまりなかったサラブリセンターにおいて、クロタラリアの自家採種が続けられ、種子を増やして田んぼの裏作や野菜の間作など積極的に活用されるようになりました。今年は水田裏作でクロタラリアと緑豆との混作も見られました。次期の水稲作では、有機肥料を投入する必要はないでしょう。タイでは緑豆を食べるので一挙両得です。また、インセクタープランツとしてマリーゴールドなどの花も畑の中で栽培されるようになり、昨年提案した果樹、野菜、





タイ国内向け研修会 講義



自家採種講習会



クロタラリアによる土壌改良を行っている「5ライ」圃場

ハーブ、花を総合的に栽培していく区画が増えて、いつも花があり非常に綺麗になってきています。以前は、どちらかというと日本の有機農業や自然農法のマネをしている感じでしたが、どんどん熱帯に最適化した自然農法の畑になってきています。来年の自然農法国際研修会のスライド写真はさらに充実していくことになると思います。

その後、ナスのタネ採り実習（昨年はミニトマトとカボチャ）を行いました。タネ採り実習が充実してきた結果、自家採種のタネはサラブリセンターが一元管理することとなりました。スタッフは、皆で採種したタネを使うことができるが、使った分だけタネ採りして還元することを前提とし、シードバンクとして運用できるシステムの構築をお願いしました。

午後は「タイにおける自然農法の普及」と題して、充実してきたサラブリセンターがさらに発展し、訪問者に適切な情報を提示できるように記録を取るの大切さについて

話しました。お互いがどのように栽培しているのか示せるように、有機認証がとれるくらいの記録を整えるようにお願いしました。

自然農法国際研修会には、熱帯地域に自然農法を普及するきっかけとなるという目標があります。百聞は一見にしかずとのことわざがありますが、サラブリセンターが発展して熱帯地域のモデルとなり、タイ国内外からの視察者がマネをしたくなるような自然農法を見せられる農場になってきています。

3年前より国際研修会と同時にタイ国サラブリセンター向けの研修会を開催し、サラブリセンタースタッフに自然農法を直接伝える機会が増え、熱帯ならではの混植など、農地生態系の充実が図られ、農場見学や農場における実習と講義の内容が合っってきていると実感します。昨年から始めたタネ採り実習もこなれてきており、今後は自家採種のための交配の実習も考えています。

（榎原 健太郎）

